

## 十六万年の記憶

いまや形を温度を記憶しておいて形が戻る形状記憶合金ができ、望みの温度で色が変わる不思議なインク、メタモカライは温度を色で記憶している。自然でも数多くの記憶の刻み込みがあり、樹齢一千年を越える屋久杉の巨木には年輪に相応した記憶が残っている。

年輪には強い台風の襲来による猛烈な風の記憶が斑点模様の痕跡として刻まれ、年輪の年代とともに調べれば屋久島付近を通った数多くの強い台風の歴史がわかる。古くは仏教伝来の六世紀半ば頃に、推定で秒速九十五メートルの巨大台風が襲来が記憶に刻み込まれている。年輪の幅の延び縮みからは、弥生時代以来の二千年にもわたる気候の変化も追える。

同じように南極大陸の水にも数十万年の記憶が残っている。南極氷は降り積もった雪が重なり氷に変化していったもので、その中には降った当時の空気が無数の泡となつて閉じ込められて、そのまま解けずに氷の化石となつて残っている。この厚い氷をボーリングして掘り出せば、氷の年輪を輪切りにして過去の記憶を甦（よみ）返らせることができる。

南極大陸の最も奥深いところのボストク基地付近で掘り出された氷の柱「アイスコア」は、二千八十三万、時間にしておよそ十六万年分にあたる。この間の気温の変化をはじめ、いま話題となつている地球温暖化に影響する炭酸ガスやメタンガスの数千年、数万年周期の変化がわかる。

ボストクの氷柱に刻みこまれた十六万年の氷の年輪は氷河期、間氷期と繰り返される自然のリズムとともに、炭酸ガスやメタンガスの変化カーブが気温の変化と極めてよく一致して動きをしている。

「このまま炭酸ガスを増やし続ければ地球は限りなく暑くなりますよ」と、ボストクの氷柱から甦（よみ）らせた十六万年の記憶はそう警告している。自然のリズムそのままの姿で子孫に伝えたいものである。（村松 照男）